

教団新報

定 価 1部144円(本体133円+共206円)
予約購読料 1年分 5,150円
紙代のみ 3,600円
振替 00140-9-145275
本紙を購読ご希望の方は、前金を
そえて、お近くのキリスト教書店
へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546
FAX03(3207)3918
URL http://uccj.org
発行人 長崎 哲夫
編集主筆 渡邊 義彦
印刷所 株式会社きかんし



アイヌ紋様の切り絵を手に手に

夏、子供たち、青年たちのプログラム

西東京教区と北海教区は、宣教協約を結んで31年目を迎えている(1期5年で第7期の1年目)。2013年の夏、西東京教区の小中学生数名を派遣して、道北クリスチャセンタ―、興部伝道所に宿泊させてもらい、子どもたちが出会い、北海教区の様子や自然に直接触れる機会が与えられた。そのときの出会いや一緒に礼拝を共にしたことの大きな恵みを受けて、各自の成長ぶりに開催を心から感謝した。次回はずっと、北海教区の子どもたちを迎えたいと願って、3年後の今年、8月1日〜4日にやっと実現することができた。

当初は、冬休み、春休みを検討したが、北海道の長い休みと日程が合わず結果的に涼しい北海道から暑い東京に迎えた。直前に興部の子どもたちが来られなくなり、1人は釧路、1人は函館、2人の引率者が紋別から出発して羽田で落ち合うという、どきどきのスタートだった。無事に羽田で4名を迎えてバスを使って高井戸教会へ。夕方、西東京教区議長・真壁蔵牧師(相愛教会)の歓迎のあいさつと共にぐるっと輪になって礼拝が献げられた。外を散歩しながら、思ったほど暑くなくてよかったと聞いてほっとする。高井戸教会泊の後、ジブリの森美術館へ行き国分寺教会へ。興部の開拓期ハウレット宣教師から洗礼を受けた国分寺教会員と前回参加者の子どもの証し、伊藤大道牧師による北海教区と牧会する興部伝道所の紹介やアイヌ紋様の切り絵の指導。それぞれにとても感銘を受けた。夕食のバーベキューはCSのお父さんたちの奉仕もあり、にぎやかに31名が集った。3日目は奥多摩に移って西東京の中高生キャンプに1日参加し、翌日の出発のため、夜、高井戸

西東京・北海教区子ども交流会

31年の協約、さらに先を望んで

教会へ。8月4日朝の便で、再会を願って羽田で別れた。日に日に打ち解け、顔が輝いてくる子どもたちが頼もしさを感じて、次の時代への主の備えを信じ期待した。16教会44名の参加であった。(願念 望報) 参加者の感想 利別教会 中2男子 今回は初めて交流キャンプに

南三鷹教会 小5女子 今回のキャンプには、北海教区の様々な所から2人来てくれ、先生も2人来てくれました。ふだんはなかなか会えない北海教区の子と同じことをするというきょうな体験だったと思います。 みんなでジブリ美術館へ行く時もまとまって行動し協力し合えたと思います。男子とも仲良くなれてとても相手とわかり合えたキャンプだったと思います。 どの日も楽しくすごせてよかったです。

I Love Taiwan Mission 2016

大きな神の民に迎えられて

台湾基督長老教会が主催する「I Love Taiwan Mission」(ILT)は2002年から始まり、今年で14回を迎えた。6月29日から7月16日まで「The Present from God」のテーマで行われ、42名の海外青年、142名(スタッフも含む)の台湾青年が参加した。教団からは台湾協約委員会を通して2名の参加者が与えられた。 参加者の感想 妹尾のえみ(日本フルゴスベル教団 純福音成田教会) 私にとって台湾は、ただ単に一つの外国という認識でした。しかし、今回の「I Love Taiwan Mission」を通じて、台

湾は私にとって大きな、重要な存在になりました。それは私がこのキャンプを通して貴重な経験をたくさんすることができたからです。本報告では、特に私が心動かされた事柄を2つ挙げたいと思います。 1つ目は、今回のILTで私と同年代の青年たちが台湾のミッションのために準備を重ね、動いている姿を間近で見ることができました。様々なプログラムを青年たちだけで、また楽しみながら進めている様子を見て、その姿勢と行動力に感動しました。台湾でのクリスチャン率は約6%とそう多いとは言えませんが、そんな中でも台湾クリスチャン青年たちは、台湾のミッションのために自らの

体を動かして互いに協力し活動していました。日本の青年たちも習うべき姿だと思いました。そして、同世代に、他の国にこのように神のために働く青年たちがいるということが私の励ましとなりました。 2つ目は、台湾の地域教会にグループで派遣された奉仕をしたことです。私のグループはマレーシア、シンガポール、台湾そして日本からの青年で構成されたグループでした。国が違えば、文化も違い、それぞれが違うバックグラウンドを持ってきます。そんな人々が集まっても、皆が心一つとなつて何日も心から喜んで共に働けたのは、福音宣教という同じ目標があるからだと思われしました。同じ神を信じる者たちが集まり、その方のために働き、礼拝し賛美する姿は、本当に美しいものです。

のだと感じた日々でした。日本に帰った今もなお、この経験が私の糧となっています。 今回ILTに参加することができたことを心から嬉しく思っています。台湾も日本も福音宣教はまだまだされていく必要があります。そして青年はその働きを担う大きな存在であると思います。 ILTはそういった思いを持つ青年たちを更に励まし強めてくれるミッションキャンプです。これからもこのILTを通して、台湾のそして多くの国々の宣教の働きが祝福されていきますように祈っています。 最後に、日本基督教団がたぐさんのサポートと共に私をILTに送り出してくださり、ありがとうございました。そしてこの機会を主に感謝し、報告とさせていただきます。



台中東海大学のチャペル前で(右端が筆者)

荒野の声

小さいときからリレーというワクワクする。幼稚園のとき良い思いをしたのが原点にある。バトンが来るまでのドキドキ、受けるときの緊張、そして受取って全開でコースを走り出し、前を走る相手を懸命に追いかける気持ち、その後も何度か経験した。今も幼稚園の子供たちのリレーにも思わず応援に力が入ってしまう。▼日本チームがリレーで、100メートル9秒台を擁する他国チームと互角に戦ったのは、バトンパスを数十センチずつ伸ばし大人が両手を広げたほどのわずかな距離を稼いでコンマ何秒を削り出したことが大きな勝因と聞いた。スムーズなバトンパス、的確なバトンの受け渡し、2着を着をたらしたということだ。▼使徒は、後ろのものを忘れ前のものに全身を向けつとと言う。バトンを受取って解き放たれたらそうだ。次の走者にバトンを渡すことに懸命だ。けれども、手にするバトンをこまめに繋いでくれた前走者たちがいる。教会の歴史、神の民の歴史を決して軽んじない所以である。この連携があつて、はじめて次の人たちに、である。スムーズな交代、懸命な信仰継承。使徒も競争者たちを見て教会を考えたのであろう。

▼救援対策本部会議▲

釜石「お茶っこサロン」報告を受ける

7月29日、救援対策本部第14回（通算第48回）会議を、日本キリスト教

会館教団会議室にて開催した。

会議の冒頭、釜石市社会福祉協議会の菊池亮課長より、「釜石市復興の足取りを振り返るー『お茶っこサロン』の果たした役割ー」と題して、釜石の復興状況、被災地サロンが果たした役割、復興に関わる現在の課題等について報告してもらった。

報告により、あらためて被災地においてお茶っこ活動が果たした役割の大

きさ（被災者の様子や動向の把握など）を確認した。

会議では、6月30日現在、国内募金が10億2540万4690円、海外からの献金が4億487万6231円となってい

ることが報告された。続いて救援対策室・担当幹事より、会堂・牧師館等貸付金返済状況、教団からの貸付金総額（16教会・2幼稚園に対して2億8035万3031円）、こひつじキャンプ開催予定等の報告と本部会

計の報告がなされた。

被災教区報告として奥羽教区からは、江刺教会が新礼拝堂建築のために現礼拝堂を取り壊したこ

と等が報告された。東北教区からは、同教区で呼

びかけている全国募金の状況、今後のエマオ仙台および「いずみ」の活動についての検討状況等が報告された。関東教区か

らは水戸中央教会が献堂式を行ったこと等が報告された。

審議事項においては、「いずみ」・北日本3教区親子短期保養プログラム支援承認、郡山細沼教会敷地の除染対策工事に係る資金支援検討（救援対策室で検討する）、エマオ仙台・「いずみ」の活動に対する教団からの支援検

◆ 第7回夏期研修会 ◆ 伝道推進室主催・教師委員会後援

公共教会の基本を共有

過去最多の46名の参加者を得て、伝道推進室主催「教師継続教育『第7回夏期研修会』が8月9

日から11日にかけて、日本聖書神学校を会場に開

催された。主題を「教会ー主の教会を建てる」とし、公同

教会の基本的理解を共有するために、「日本基督教団という教会の公同性」に

ついて「近藤勝彦氏、「教会の公同性をめぐって」神代真砂実氏の講演があり、また「教会的説教」小泉健氏、「ホーリネス教会の教会形成の特色」潮

義男氏の講演があった。参加者は難しい神学議論にも大きな刺激を受け、

良き学びの時となった。牧会夜話では、大隅啓三、軽込昇陽退教師から

ついで、城山公園付近を案内してもらい、高台からの景

色に、震災の大きさと怖さを改めて知らされた。

そこから野田西仮設に移動し、ハートフル釜石の佐々木ムツ子さんの指導の下、南野田集会所での炊き出し準備がスタート。前もって計画した

メニューは《冷やうどん・プルコギ・サラダ》50人分の時間を過ごした。四季を題材にしたスタンツを用意し、参加者の方々と共に歌ったりお喋りをしたり。あっと

いう間の2時間半。まだまだ大変なこの地で頑張っている仮設の方々の笑顔と涙を決し

て忘れない。「イエス様、この時をありがとうございます」と祈りつつ。これからもの絆を大切にしたいと思う。

（上村真理子報）大井バプテスト教会員

釜石ボランティアー他教派ボランティア初参加



炊き出し準備（野田西仮設にて）

7月11日14時から7月13日12時頃まで、日本基督教団首里教会、きのわんせみナーハウスにおい



首里教会に集う

沖縄にて委員会開催

▼部落解放センター運営委員会▲

沖縄にて委員会開催

て、今総会期第4回部落解放センター運営委員会が開催された。出席者は20名。開会礼拝では沖縄

教会議長・平良修牧師（うふさと伝道所）が「共に生きる」と題して説教した。

活動委員会報告、決算など11日17時まで行った後中断をし、米軍普天間基地ゲート前にて「ゲート前でゴスペルを歌う会」に参加した。当初は2泊3日でフィールドワークと審議を行う予定をして

ていたが、7月10日の参議院選挙の翌日から高

江 米軍新ヘリパット建設で工事再開との報告が入り、運営委員から「翌朝から高江に行き、一日高江で座り込みに参加する事」の動議が出され、採決をもって「12日高江座り込み」が決定された。11日夕食後から会議を再開し、東谷誠運営委員より教団総会で行う「解放劇」練習中の報告がなされた。小林明主事より狭山事件再審を求め8月25日に日比谷公園から霊南坂教会までデモ行進を行うとの報告を受けた。

2017年「部落解放全

国会議」を北海教区で行うことを承認した。次回「キャラバン」開催については継続審議となった。各報告、各教区報告など様々な取り組みについて報告をなされ、後藤慧運営委員の閉会の祈りをもって11日22時45分に委員会を閉じた。

運営委員会はこれまで何度も辺野古新基地工事反対の抗議声明を出してきた。沖縄の方々と共闘するため、12日には高江、13日には辺野古に行っ

た。次回委員会は2017年2月13日、14日、場所は教団会議室で開催予定。

（平井克也報）



初めて日本聖書神学校を会場として、46名が参加

第27回全国キリスト教

に、死なずに、消えずに、自分に固有の生命を生きる力を伝えるのが教師の使命であり、そこに教師の課題があると語った。

そして、これらの教師の業は、教師自身が「罪めに祈りの担い手になってほしいとの願いが紹介されたことは、教団の願う「キリスト教学校との協力」への具体的な一つの提言であると思う。

最後の派遣礼拝では、

うな自分の存在を委ねて生きる世界があることを紹介した。そして、教師とは「他者」である生徒に命がけの関心を向けていく仕事であり、具体的には、相手の言葉を「徹して聞き切る」ことを生涯貫いて来たという。そのような中で、時代の潮流に飲み込まれ易い生徒

意識」に立つことなしには為し得ない、神によって拓かれる世界であると結んだ。また、恩師の言葉として、「罪意識のない運動は、最後は憎悪と対立しか生まない」との言葉を紹介した。

一つの分科会では、キリスト教学校から教会に

向けて、教師や生徒のた

関田寛雄教師によつて、山田洋二監督のエピソードを交えながら、神は、わたしたちの手に負えない重荷を引き受けてくださる方であると十字架の贖いを信じて立つ教師への派遣の言葉があった。

(宮本義弘報)



15年11月27日逝去、71歳。大阪府生まれ。68年関西学院大学院卒業。同年より81年まで西九条教会を牧会。遺族は妹・東條直美さん。

新屋徳治氏（隠退教師）
16年5月31日逝去、96歳。東京都生まれ。49年日本聖書神学校卒業。同年より鹿沼、宇都宮、池袋西教会を経て日本聖書神学校に務め、曙教会を



16年6月23日逝去、90歳。福岡県生まれ。54年日本神学専門学校卒業。同年より戸畑教会を牧会。遺族は妻・村上博子さん。

大澤正司氏（隠退教師）

A black and white portrait of Osamu Ohsawa, an elderly man with glasses, wearing a dark suit and tie. He is looking slightly to the left of the camera. The background is dark and out of focus.

退 遺族は妻・大澤康子
さん。

吉岡適子氏（隠退教師）

16年6月27日逝去、97歳。京都府生まれ。41年聖和女子学院神学部卒業。55年より物部、志賀郷、物部教会を経て99年隠退。遺族は甥・高田志郎さん。

石井錦二氏（松戸教会担当）



A black and white portrait of Dr. Robert C. Anderson, an older man with short, light-colored hair, wearing a dark suit, white shirt, and a patterned tie. He is looking directly at the camera with a slight smile. The background is a blurred outdoor scene with trees.

16年7月17日逝去、95歳。北海道生まれ。45年日本基督教神学専門学校研究科卒業。46年より小樽公園通、札幌北光、小樽、岩内、帯広、新得、手稻川力、島松教会を経て86年隠退。03年復帰、幌泉教会で10年まで代務し、隠退。遺族は息・十橋求さん。

江戶久一氏（隠退教師）

教師異動

駒	辭(担)大坪哲也	就(担)今井このみ
田	就(担)大坪哲也	教師隠退
田	就(担)縣 洋一	山田喬夫、石黒悦雄、
濱指路就(担)乾 元美		高橋三郎、鈴木岩夫、
倉雪ノ下		大崎敬子、伊藤瑞男

松戸多聞	就担(小宮一文 辞担)大村眞澄	兵庫区南部 〒653-0812 神戸市長田区長田町1-3-11 サン
崎野	就担(土井栄子 辞担)三浦國昭	光の子学法幼稚園記念 会気付
城学院大学	辞(教)深井智朗	伝道所通信先廃止
山学院高等部		喜音

スイスのSEK（スイス・プロテスタント教会連盟）とその宣教団体であるミッション21、韓国のPCK（大韓イエス教長老会）、PROK（韓国基督教長老会）そして日本基督教団による三国間協議会は基本的に4年毎に開催される。今回のホスト国はスイスであり、バーゼルにあるミッション21の本部での開催となった。

それに先立って、7月3日、ケルン・ボン日本語教会に、2016年4月に赴任した佐々木良子宣教師を訪ねた。

当日は地域の合同礼拝が行われ、午後は夏休み前恒例となった「シュトラースェンフェスト」と銘打ったお祭りであった。20店舗ほどの屋台はすべて教会からの出店であり、良き交わりの場となっていた。佐々木宣教師

は習いたてのドイツ語で、臆することなく果敢にコミュニケーションを多くの方と図っていた。

礼拝開始が午前11時過ぎだったため、その前にケルン大聖堂のミサに参加した。ファミリーが対象の礼拝であったが、奥の小礼拝堂はほぼ満席で、司祭が実に楽しそうに説教していたのが印象に残った。

スイスのバーゼルで7月6日（8日）に三国間協議会が行われた。教団では世界宣教委員会の下にスイス協約委員会があり、三国間協議会を担当している。横山基生委員長と廣石望書記、そして青年代表として東京神学大学の鄭なおみ神学生、事務局からは加藤謙幹事、廣中佳実職員が参加した。

教団はSEKと宣教協約を結

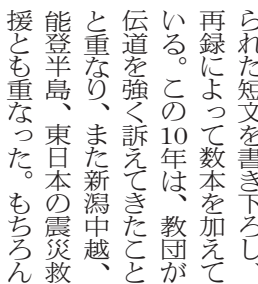
んでいるが、現在宣教していない。そのため三国間協議会をどのよう
ていくかが、今回教団の大きな課題であった
教会の実情を話し合った後で、新しい試みとして、2年毎の青年交
流会が提案された。次回のホスト国である韓国で2018年にス
イスと日本からそれぞれ6名ほどの青年を派遣し、交
流会を持つという企画である。青年への宣教が三国間
においても重要な課題であることが認識された。

8日午前に持たれたスイスと教団との二国間協議では、スイスに宣教師を派遣する場合



新報紙面での本の紹介は、出に執筆したものをまとめた

新報紙面での本の紹介は、出版界の動向を敏感に察知し、鋭い批評を交え、読者の関心を引く。版局ニュースがほとんどで、特別枠を設けるのは珍しい。紹介したい新刊が、新報主筆の任を負われた竹澤知代志氏（現・出版局長）が本紙「荒野の声」欄に並べ、これに書きたためてこ



これら教団の取組みへの関心と共に、教会、信仰のこと、家族やペットのこと、旅行、畑等々、氏の関心は広い。また、広汎な読書にも多く触れる。字数の限られた小さなコラムである。その時々、時事的な関心もある。そういう限界を補うメモを要所に加えているのもおもしろい。表紙を飾る木口昭太郎氏の絵、著者子息による本文挿絵も味わい深い。手に取り読まれることをお勧めする。(日本キリスト教団出版局 A5判並製・144頁 *本体1600円)

相模原障がい者施設殺傷事件に際して

2016年8月9日

日本基督教団社会委員会委員長 芳澤 信

「息あるものはこそって主を賛美せよ。」

(旧約聖書 詩編150編6節)

「産めよ、増えよ」

(旧約聖書 創世記1章22節)

すべて命あるものは神の祝福の中に生まれます。神の祝福の中で「命はつながりにおいて生きる」ことができます。命と命のつながりの中で人間は生きることができます。それ故「息あるものはこそって主を賛美せよ」と歌われます。命が第一にされない社会は破綻します。命ではなく、経済が第一にされ、命が軽んぜられる世界は、このつながりを破壊し、人間の尊厳が冒され、憎しみと怒りが世界に広がります。今世界はその痛みの中にあります。

私たちは普段、点数や成績や能力、その成果の大小などによって人を評価することに慣れ切っています。そのような中でいつの間にか人の命の価値が見えなくなる危険性があります。誰が生き延びていいのかわからず、誰が生き延びていけないのかということについてまで、人は決めることはできません。

聖書は、人は皆、天地万物を創造された神の御心によって生きることを示します。もし私たちが、自分の能力を基準にされて神から見られるとしたら、誰も神の前に生きることができないではありません。神の赦しと慈愛により私たちは生きています。世の全ての人が等しくその神の愛の下にあります。人は、自分自身を含めて、命の可否について判断を下すことはできないのです。

神は一人ひとりに固有な命を与えておられます。誰もがその固有な命の中で、時には喜び、時には悲しみ、時には苦しむのです。その一つひとつの命に、神は意味を与えておられると信じます。

2016年7月26日未明、神奈川県相模原市緑区千木良にある障がい者福祉施設「津久井やまゆり園」で、刃物による殺傷事件が発生いたしました。同日中に19人の死亡が確認され、26人が重軽傷を負いました。

今回の事件は経済優先社会の価値観に毒された社会の犠牲者であり、このような社会にしてしまった私たちの悔い改めが求められる痛ましい事件です。

突然にして愛するご家族を失い、大きな悲しみと嘆きの中にある方々に神の深い慰めを祈ると共に、けがを負われた方々の癒しを心よりお祈りいたします。

津久井やまゆり園に献花におとずれたある介護福祉士は「明るい雰囲気施設の施設がこんなことになって残念です。私たちは障がい者ではなく人として接しているのに」と目に涙を浮かべて話しました。明るい雰囲気施設の施設が地獄図となり、多くの犠牲者を出した悲劇は、日本のみならず世界に衝撃を与えています。

癒しがたい衝撃の痛みの中にある犠牲者のご家族、津久井やまゆり園の職員関係者の方々のために祈りを合わせたい。

願わくは、全ての人々が主イエス・キリストの神を正しく知ることによって、神の愛の中に一人ひとりが置かれていくことを知り、互いに愛し合い、祈り合い、励まし合いながら歩み共生社会を目指したいと願っています。

「日本基督教団全国教師会」－教師が助け合うために－

日本基督教団の中に「全国教師会」があることをご存知ですか？

この会は、1949年に開催された最初の全国教師大会から教団の要職者が「教師の交わり」の必要を覚えて、1951年に発足しました。当時、結核を患いながらも卵一個が買えない教師、経済的理由で自分の葬儀が出せない教師がいて、教師同士が互いに助け合って行こうという志でした。

現在も当初の趣旨に沿って、教団教職の交わりと互助の推進を深め、隠退後も教師間交流が保たれるように、年2回の会報『全国教師会報』を発行しています。喜びも悲しみも分かち合おうと、会員の会費（年額6千円、隠退後は3千円）や献金から、祝事・慰労・見舞・弔意を贈呈し、必要な場合は融資も行っています。また、毎年7月第1主日「教師の日」を知っていただくように努めています。

連絡先 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-31 日本基督教団事務局内「全国教師会」
TEL 03-3202-0541、E-mail zenkoku.kyoshikai@gmail.com

今日、伝道者の生活が配慮されてかつての困窮が無くなったかのようにですが、一方で教師の減少や信徒の高齢化は否めず、将来には過去にも増して厳しさが予想されます。この機会に、教区・支区の教師会や出身神学校同窓の支え合いだけでなく、教団視野で「全国教師会」の意義をご理解いただければと思います。

今年3月、当会の前理事長佐野英二教師が隠退し、新理事長に梅津裕美教師が就任しました。信徒が「全国信徒会」や「隠退教師を支える運動」で教団を支えていることを思いますと、全国規模で教師同士の「互助」を目指すこの会を継承し活動が続けたいと願っています。

日本基督教団の現任教師は、ぜひ入会してください。入会后、隠退された場合も引き続き会員として互助の交わりが続きます。

お詫び

4845・46号掲載「平和メッセージ」冒頭の聖書引用の後に次の文章を加えます。

わたしたち日本基督教団と在日大韓基督教会は、アジア・太平洋戦争における罪責を神の前に想起し、近隣諸国への侵略と植民地化政策により多大な苦しみを与えたことを心からお詫びし反省しつつ、平和の主イエス・キリストによる和解と平和を祈り願います。そして、武力・戦争への道に対して明確に否を唱える平和の道と、平和と福祉を例外のない全ての人と分かち合う共生社会構築の道を模索してゆきます。弱者を切り捨ててではなく、マイノリティの叫びの中にイエス・キリストが呼びかける声を聞かなければならないと確信します。



松本 宏子さん

主にある交わりに生かされて



水海道教会員

「大切なものは奪われていない」、15年9月の「関東東北豪雨」による水害からの復興に向けた歩みを振り返り、松本宏子さんは語る。

お宅は床上150センチが浸水し、一階にあったもののほとんどを廃棄することになった。所属する水海道教会、併設する二葉こども園も30、40センチ程浸水した。

高度経済成長期には、飛躍的に経済が発展し、持ち物も増え、それがもたらす便利さを享受して来た。今回の水害で、持っていた物の多くを失った。しかし、失つてみると、「生きて行く上で必要なものはそれほど多くない」ということが分かって来たという。

松本さんは、教会役員として奉仕するようになってから、月報「交わり」の編集、教会ホームページの管理、更新を担当するようになった。水害が起き、実家に避難する際に、ノートパソコンを携えて行ったため、教会の電話も開通しない中、ホームページで情報を流し、月報も発行することが出来た。普段、それ程多くないホームページの閲覧数が、水害の際に大きく上昇したそうだ。その情報を得て、地域の教会の牧師、信徒はもとより、全国の教会から多くの献金、支援が寄せられた。

家族や主にある兄弟姉妹が示してくれる温かい見舞いの言葉や差し伸べてくれる手助け、それらを通して証しされる神の存在を深く知らされたという。洪水でさえも奪うことが出来なかった、主にある交わり、主が与えてくださる繋がりがこそ人を生かす大切なものであり、他のものは、多少、便利になるかどうかという相対的なものでしかないとの思いに至った。

教会の教勢低下を思わずにはいられない昨今、諸教会と共に、主にある交わりを形作るべく仕えて行きたいと語る。

越谷教会付属越谷幼稚園での礼拝は、日曜日は教会学校幼稚科として、水曜日は全園児の合同礼拝として献げられている。

今春、つばきちゃん越谷幼稚園を卒業して小学校に行ったら、1年生になって、休み時間、校庭で遊んでいる時、つばきちゃんはお腹を男の子に蹴飛ばされて泣いた。その男の子は「ごめんね」と言ってくれた。クラスで大騒ぎとなった。次の授業は「道徳の時間」でこの問題が取り上げられた。男の子は激しく叱られて机を叩かれたと思っ泣き出した。

お腹を蹴飛ばされて

ゆるせるのか」と教師がつばきちゃんに問うた。つばきちゃんは「ごめんねって言ってくれたから」と答えた。教師の問いをつばきちゃんは叱られたと思っ泣き出した。

（教団総会議長 石橋秀雄）

廊下の男の子もこれを聞いて泣き出した。

授業の終わりの時間が来て、「A君を連れてくるように」と担任が言った。つばきちゃんを始め、何人かが迎えに行った。家で母親が「何故やるせたの」とつばきちゃんに聞いた。

つばきちゃんは「だってイエス様は十字架にかかって、みんなの事をゆるしてくれたから。みんな神様の子どもなんですよ」と答えた。この話を聞いて涙が出るほど嬉しかった。